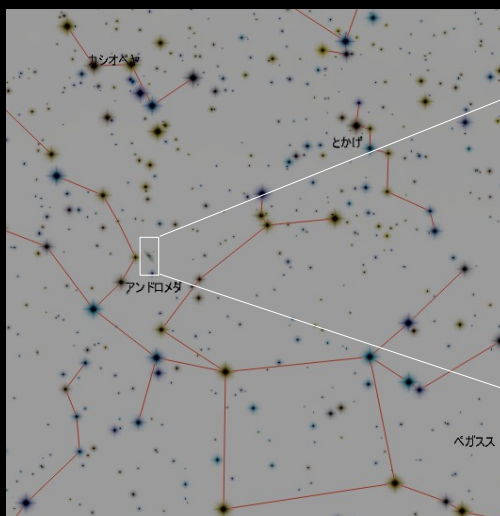


アンドロメダ大銀河 M31 2008 Restart Version (081223edit)

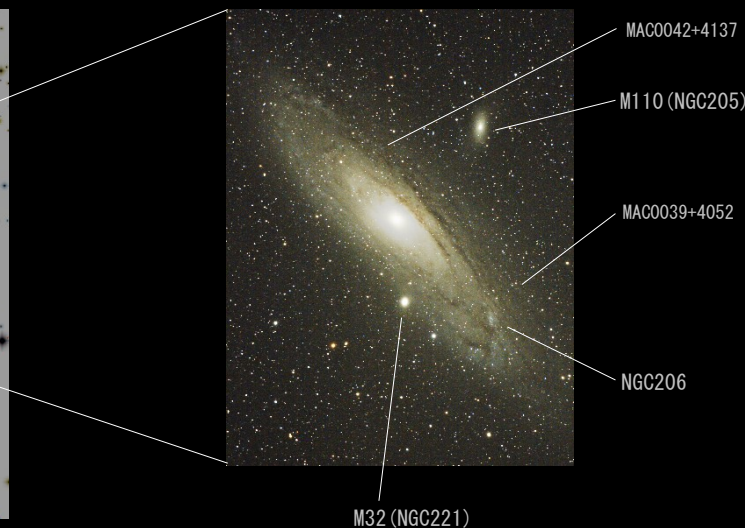
番号	赤経	赤緯	サイズ	等級	
M31 (NGC224)	00h42.7m	+41° 16'	178x163'	3.5	アンドロメダ大銀河
M32 (NGC221)	00h42.7m	+40° 52'	7.6x15.8	8.2	M31の伴銀河
M110 (NGC205)	00h40.4m	+41° 41'	17.4x19.8'	8.0	M31の伴銀河
NGC206	00h40.6m	+40° 44'	2.5x4.0'	-	M31の中にある星雲+星団



2008年11月1日、10年以上の時を経て本格的な「天体撮影」再開しました。きっかけは、「デジタル一眼」で十分な画像が得られるようになって、安価になった事があげられます。(他に仕事の事情もありましたが) 2008年春からリスタートの準備を進めて、小林氏と11/1「天城高原」へ向かいました。最初の撮影は、やっぱり「アンドロメダ大銀河」でしょう。ということで1本だけ残しておいた小さな鏡筒「タカハシ FC-50」に「改造した CANON KISS X2」をつないで撮影したのが左の画像です。レデューサを付けてもF5.8という暗さなのに、ISO1600で僅か5分で適正露出となります。画像処理を進めていくと、アンドロメダ大銀河の腕の中の暗黒帯が「こんなにウネウネしてたっけ？」と思うくらい新鮮で、デジタル一眼のポテンシャルに半ば驚嘆してしまいました。昔の銀塩写真では考えられない「出来上り」です。また撮影した画像の露出やガイドやピント等のチェックも、ノートPCを使って、その場でスグにチェックできますし、短時間露出なので枚数稼いでコンポジットすれば更に画質も向上します。(おまけに撮影後の現像やプリントのコストも掛からないです) 本当に色々ビックリのリスタート初回の夜でした。



StellarNavigator Ver. 8



アンドロメダ大銀河 M31 の存在は、望遠鏡の無い昔から知られていて、暗い空であれば肉眼でも「ボンヤリ」その姿を見る事ができます。その正体がわかったのは20世紀に入ってからで、我々の銀河系のすぐ隣にある渦巻銀河で約220万光年の距離にあって、M32とM110という伴銀河を連れています。(ちなみに銀河系は南半球でしか見ませんが大マゼラン雲と小マゼラン雲という伴銀河を連れています) M110はM31の小型版の様な感じで見えていますが、M32はボケた恒星の様に見えています。またM31の腕の中にはNGC206という星雲と星団が重なった天体を見る事ができます。拡大して細かく見ていくと暗黒帯の所々に「このような」天体を見る事ができます。MAC0042+4137やMAC0039+4052の様に番号が有るモノもあります。このアンドロメダ大銀河と我々銀河系は近づいており、数十億年後には衝突すると予想されています。

撮影日時：2008.11.01 22:38~23:03 / 露出：300sec×4枚合成 トリミング
 撮影者：小林+片山 / 撮影地：静岡県 天城高原 / 画像処理&編集：片山
 カメラ：SEO-COOLED X2 (LT) ISO1600 / 赤道儀：タカハシ P-22 自動ガイド
 レンズ：タカハシ FC-50+レデューサ(合成f1=290mm 合成F5.8)
 画像処理ソフト：StellaImage Ver.6 / 編集ソフト：OpenOffice.org Ver.3
 処理PC：VAIO VGN-NS50B/L(Core2 Duo P8400 2.26GHz メモリ2GB ReadyBoost4GB)